

留学・研究計画書

氏名 永井 リサ	留学機関名 吉林大学 東北アジア研究院 東北アジア総合研究所
留学先国名 中国	留学期間 西暦 2003 年 3 月 ~ 2004 年 3 月
研究テーマ (留学目的) 「森から見た東北アジア史—鴨緑江森林開発を事例として—」	
研究テーマ (留学目的) の説明	
<p>申請者は上記のテーマで博士論文執筆を予定しており今回のフェローではその準備作業を行う。</p> <p>博士論文では中・朝両国国境地帯に広がる原生林の開発及びその破壊過程を取上げ、その開発開始から終焉迄を一貫して検証する。鴨緑江流域は清朝期満州族の発祥地とされこの地域を保全する為に封禁政策（開発禁止政策）が取られていた。そのためこの流域は針葉樹を中心とした豊かな森林が 19 世紀半ばまで保たれていた。しかし 19 世紀半ばに到ると鴨緑江流域は封禁政策の崩壊に伴う山東からの移民の流入により急速に伐木業が興り短期間で華北一帯の木材供給地へと変貌し 19 世紀末鴨緑江産木材は中国国内木材流通量の約半数を占めるまで成長していた。その為東北侵略を狙う日露によりこの鴨緑江森林は重要な利権として争奪の対象となり、日露戦争の戦勝により伐採権を獲得した日本は日中合弁の林業会社「鴨緑江採木公司」を設立した。この会社設立によって本格的な林業開発が進められ、鴨緑江流域は中国国内の木材供給地から東アジア一帯の木材供給地へと変貌する。これに伴って鴨緑江森林資源は急激に減少し、1940 年代の水豊ダム建設により木材流筏が完全に停止したことで鴨緑江林業は終焉を迎えた。</p> <p>予定している博士論文では以上の経緯を明らかにする為、Ⅲ部構成を取り、Ⅰ部では「清朝下での伝統的な森林管理制度の崩壊から伐木業の開始迄」として清朝下での伝統的な森林管理システムの存在とその崩壊過程を明らかにし、Ⅱ部では「近代下における森林開発の進行」として日本により 1908 年設立された日中合弁林業会社である「鴨緑江採木公司」の成立過程を取り上げその植民地的林業投資・経営について検証を行う。さらにⅢ部では「森林開発の進行に伴う森林資源の劣化」として、鴨緑江流域木材生産の減少過程と水豊ダム建設による木材流筏の停止—鴨緑江林業の終焉と代替産業の勃興過程迄を調査する。</p> <p>博士論文では鴨緑江流域に広がる原生林の開発過程を開始から終焉まで明らかにすることで、近代東北アジアにおける森林開発構造を明らかにし「森から見た東北アジア史」の構築を試みるものである。特に博士論文第Ⅲ部は現在の鴨緑江流域と直結する内容の為現地調査による補足が欠かせない。また鴨緑江林業に関しては遼寧省档案馆、吉林省档案馆、丹東市档案馆に膨大な関係文書があり、これらの文書資料を活用して鴨緑江森林開発過程を多面的な検証を行う必要がある。今回のフェローでは鴨緑江流域の現地調査・文書等の資料収集と併せて東北各地の林業視察も行いこれらの成果を合わせて博士論文を完成させる予定である。</p>	

成果報告書

助成番号

02 -02

氏名 永井リサ	留学先国名 中国	機関名 吉林大学 東北アジア研究所
研究テーマ：森から見た東北アジア史 —鴨緑江森林開発を事例として—		
はじめに		
<p>報告者は2004年4月-2005年4月の間、吉林大学東北アジア研究所に留学した。当初、長春という田舎に留学している日本人留学生はせいぜい数人だろうと予想していたが、前年のSARSの影響で、北京や上海に留学する予定で変更せざるを得なくなった日本人学生が約30名程吉林大学に留学しており、予想外に賑やかな留学生活のスタートとなった。報告者はここで、吉林中国近現代東北農業史を専攻する吉林大学大学院東北アジア研究所の衣保中教授の指導を受けながら、長春及び瀋陽にて資料調査を行い、また中国東北全域で現地調査を行った。</p>		
1. 研究の目的		
<p>報告者の研究テーマは、清末以降に本格的に開始される鴨緑江流域における森林の開発過程の検証である。鴨緑江流域はその源流が長白山にあるため、満洲族の聖地とされており、またこの地域では朝鮮人参がとれる参山が数多くあり、それらはすべて清朝皇室の貴重な財産とされたこと、さらに中朝国境地帯の緩衝地としてこの地域は一切の民間人の立ち入りと一切の開発が禁止されていた為、禁が緩む清末まで虎や豹の住むような豊かな原生林に覆われていた。しかし19世紀末、日露の鴨緑江森林利権争奪に対抗するため、また政府の財政の逼迫したことも加わり、一旦森林の伐採が許可されると一気に鴨緑江流域の森林伐採が進み20世紀初頭には既に森林資源の枯渇が叫ばれるという、急激な森林破壊を経験した地域であった。</p>		
<p>報告者はこの問題を清末民国期のみの問題ではなく、清末から現代までの一貫した流れの中でこの流域変容をも検証したいと考えている。また中国東北、内モンゴルにおける砂漠化の進行と、それを食い止める緑化事業にも関心を抱いている。その為、留学期間は資料調査のみならず現地調査も重視した。留学期間は①清末・民国期を中心とした林業資料の収集②各地での現地調査③中国東北、内モンゴルでの砂漠化の現状と緑化事業の視察を中心に研究を行った。</p>		
2. 資料調査		
<p>夏季休業となる7月以降の現地調査に備えて中国語のヒアリング力を高めるため、午前中は吉林大学国際交流会館で漢語クラスを受講し、午後は吉林大学の東北アジア研究所で、中国東北農業経済に関するゼミを受講しつつ、吉林省档案馆で林業関連の閲覧調査を行った。</p>		
<p>主に満鉄資料を集めた吉林大学の特色文庫、吉林省档案馆、吉林市図書館、満鉄資料館、遼寧省档案馆等で林業関係資料を中心に閲覧・複写作業を行った。特に吉林省档案馆では、清朝から民国期における林業行政に関する档案の閲覧を優先して行った。</p>		
吉林省档案馆で閲覧した档案は主に以下のようなものである。		
<p>全宗15号 吉林林業総局 316巻 全宗16号 吉林四合川林業局 94巻 全宗20号 吉林山蚕局 212巻 全宗42号 吉林官参局 4巻 全宗114号 吉林森林局 996巻 全宗116号 吉林松江林業股份有限公司 3巻 全宗20号 吉林官弁蒙江林業局 264巻 全宗131号 吉林墾殖分会 74巻 全宗189号 吉林省城木税征收局 319巻 全宗203号 吉林華森製材公司 171巻 全宗235号 吉林松江林業局 1巻</p>		

この中でも特に清朝末期設置された吉林省の林業関係の専門機関である林業総局関連档案（吉林全省林業局档案 15 号、315 卷、588 件、4817 頁）の閲覧・複写作業を重点的に行った。清末における日清、日露戦争に伴い急激に膨脹した軍事費や、民国期における、張作霖を初めとした中国東北における軍閥の財源には元来雑税であった木税が利用されており、森林から上がる利益は政治的にも非常に重要であった。これらの機関の設置経緯、設置に関わった人物、税の流れや機構の改編を見てゆくことで、清朝による東北森林に対する管理が、森林副産物である山貨の管轄機関から、木材伐採も含めた「林業」機関へと改編されてゆく過程を明らかにし、清末以降大量に伐採された木材の収益は中国東北社会の何を支え、何をもたらしたかを解明する。また清末民国期の吉林省の森林は日本やロシア、欧米による森林利権略奪にさらされており、森林利権問題の検証は鉄道敷設とも絡んで近現代東北アジア国際関係からも重要な問題である。そのため留学中に閲覧複写した林業総局の档案を分析することにより、林業利権から見た東アジアの国際関係やこの地域における森林利権の重要性を検証することができると考えている。

（これらの資料調査の成果は、「鴨緑江木把の暴動—中国東北から見た占領地軍政—」（日露戦争研究会編『日露戦争の新視点』）成文社、2005 年 5 月、に一部収められている）

3. 現地調査

大学院が夏季休業に入る 6 月下旬より現地調査の準備を行った。まず指導教官と相談し、清末以降における急激な鴨緑江流域森林開発の進行も、清末の中国東北地域における「皇産」の崩壊—いわゆる中国東北における国有地の解体過程の一環と考え、中国東北地域皇産跡地の現状を視察することにする。鴨緑江流域は何度も調査を行っているため、他の代表的な皇産地域である、盛京圍場及び、盛京三大牧廠、木蘭圍場跡地の現地調査を行うことに決定した。

4. 旧官営牧場調査

7-8 月にかけては、清代における盛京三大官営牧廠跡地の視察を行う。

盛京三大牧廠とは、清朝期に皇帝や八旗の軍馬を確保するため、遼寧省西部から内モンゴルにかけて広がっていた清朝官営牧場である「養息牧廠」、「盤蛇牧廠」「大凌河牧廠」のことで、これらの牧場は大きなもので直径 100 キロ以上に及ぶ広大な放牧地であった。

遼寧西部～内モンゴルの荒漠化の現状を視察するため、瀋陽以西の彰武、朝陽等の清朝の旧官営牧廠地域をひたすら西へ進み、内モンゴルのシリンドルまで西進し、遼寧西部から内モンゴルのシリンドルまでの視察を行い、各地のモンゴル人集落でいつから定住しているのか、農業の様子、干ばつ、塩害の有無等の聞き取り調査を行った。その結果、遼寧西部—内モンゴル東部は、近年 2 年に 1 回の頻度で干ばつに襲われており、降水量も解放直後は 500mm ほどあったのが、近年は 300-400mm に減少しており、農業用水の不足も深刻であるという。行き過ぎた農地化による土地の乾燥化が深刻な状況であった。

その後、2003 年より中国政府の緑化重点地域にもなっている遼寧西部地域の調査を行った。遼寧省西部の遼寧省彰武県章古台地区はホルチン砂漠の拡大を食い止めるため「満洲国」期に林野総局林野試験室が設置され、解放後その林野試験室を改編して、中国四大砂漠防止研究所の一つである、遼寧省彰武県章古台の「遼寧省固沙造林研究所・実験林場」が設置され、60 年代より熱心に砂漠拡大を防止する努力が払われてきた。

この地域は長年の努力により見事な樟子松の防風林が形成され、砂漠の緑化を成功させた希少な例として全国の緑化モデル地域となり、「緑化聖地」として度々 TV ドラマ化されている。この章古台地域における緑化事業について、研究所員にインタビューを行い、植林事業の現状視察を行った。その次の朝陽では、林業局を訪ね、開始されたばかりの緑林事業の視察を行い、朝陽市郊外を緑化するため行われているアグロフォレストリーの現場を視察した。

遼寧西部の緑化事業に関して、章古台地区「遼寧省固沙造林研究所」のスタッフによって 60 年代から営々と緑化事業が続けられてきた為、樹齢 30 年を超える美林が広い範囲に渡って形成され、一時期砂漠同然であった土地では農業が営まれ、人々の暮らしも安定していた。しかし遼寧西部の他の地域では、緑化重点地域になったものの、長年の風食で土壌自体が薄く、もしくは無く、緑化しようにもポットに入れた苗を岩山に埋め込んでゆくような状況であり、植林は盛んだが苗の活着率は悪く、緑化が進んでいるとは言い難い。現地の人々もその状況を認識しているが、まず植林に適した土地自体が少ないため、まず植林に適した土壌を作るという所から始めねばならない厳しい状態にある。

4. 鴨緑江上流域調査

9月以降は、東北東部の長白山系森林地域の視察を行った。主に、通化、集安、白山、臨江、鴨緑江上流～長白山近隣の森林状況を視察し、封山育林の状況や山地における林産物の生産（朝鮮人参、林蛙等）事業を視察し、それらがこの地域の林業に与える影響や森林回復に与える影響について考察を行った。

具体的には集安にて山林経営を行う王氏の家を訪問し、ここで聞き取りを行い、95年頃より育林封山で木材伐採が禁じられたこの地域での山林経営の実態を調査した。その結果この地域の農家の多くは、山の中で朝鮮人参を栽培し、それを通化の巨大な製薬企業に販売することで生計を立てている者が多いことが分かった。

この地域の農家は人参以外に、林蛙、養蚕、養蜂等の森林副産物で生計を支えている。これらの産業は清末から行われてきたものであり、木材伐採が不可能な現在、この地の主要な生業となっている。

その後、輝南、海龍、梅河口、柳河等の旧盛京圍場地域を巡り、100年前まで皇室狩猟地や八旗練兵場として開発が禁止され、ある程度自然資源が保全されていたこの地域が、現在どのように変貌しているかについての調査を行った。その結果、100年ほど前は八旗の巻狩りを行う為、ある程度森林や草原が保たれていたこの地域は、今見る影もなく耕地化されており、圍場の端に残された数百年を経た二本の巨樹以外、ほとんど当時の面影を残すものはなかった。また森林破壊や土壌流出の度合いも鴨緑江上流域より一層深刻であった。

5. 木蘭圍場調査

10月は内モンゴル～河北省を訪れ、清朝の御用狩猟地であった「木蘭圍場」の調査を行った。木蘭圍場、現在の河北省圍場県の「塞罕土貝木蘭圍場国家森林公园」はやはり盛京圍場や盛京三大牧廠と同じく、清朝の皇産として清末までは民間人の立ち入り禁止で一切の開発が禁じられていたが、清末財政不足などを理由として、開発が許可され民間に払い下げ、全ての森林は北京天津用の木材とするため伐採され、土地は農地化された。

この圍場は森林が皆伐された20世紀初頭には砂漠のような状態にあったが、解放後、内モンゴルの砂漠化を防止するためと、北京への風砂の害をここで食い止めるため、1960年代以降、木蘭圍場の景観を復元すべく緑化事業が行われ、現在ではある程度森林が回復している。その現状を視察し、森林の視察や現況の聞き取り調査を行った。

一見森林が回復し有名な観光地となっている木蘭圍場は、森林の大半がカラマツによる単一林であり、資金や人手不足を理由に間伐などの手入れもあまり行われていない。その為森林の状態はあまり良い状態ではなかった。また森林が少ないこの地域では、木蘭圍場は数少ない緑溢れる景勝地であり、夏は一大観光地となる。その為、ゴミ問題や、圍場内の湖水の汚染など観光地化したことによる様々な弊害が生じていた。

中国東北～内モンゴルにおける旧官牧廠、鴨緑江流域、盛京圍場跡地、木蘭圍場等の、清朝の代表的な皇産地域を回った感想としては、木蘭圍場や章古台の養息牧廠跡地のように大都市を風砂の害から守るため（木蘭圍場：北京、章古台：瀋陽）、早くから国によって緑化事業が行われた地域は比較的昔の姿を止めているが、それ以外の地域では農地化が進み、昔の面影はほとんどなく、森林率の高い東北にあっても土壌流出や干ばつに悩まされているということであり、国の施策による環境落差の激しさを痛感させられた。

7. 木材市場調査

11-2月の冬季は主に東北北部～東部における木材市場調査を行った。主に、延吉、綏芬河、東寧、牡丹江、ハルビン、長春、瀋陽、丹東、東港、大連等の木材市場に赴き、木材生産・流通状況調査を行った。

特にこの調査では、中国とロシアの民間貿易状況と、近年問題となっている中国のロシア材輸入状況を中心に調査を行い、ここ数年で20倍以上に増大しているロシア木材輸入状況について、綏芬河や東寧で市場関係者や木材会社を中心にインタビュー調査を行った。またそれらのロシア丸太、加工材がどのような流通・消費経路を辿るのかについて、ハルビン、長春、瀋陽という三大木材市場で視察を行い、ロシア木材が東北で加工され、日本を初めとした先進国へ輸出されている状況について検証を行った。

また牡丹江では、「満洲国」期からある木材市場の視察に加え、実際に木材伐採現場の視察を行い、黒竜江省における原生林の計画伐採について聞き取り調査を行った。

この調査によって中国東北の木材市場は国内・現地向け木材市場である延吉、牡丹江、長春、丹東、東港等と、ロシア材を中心に扱う綏芬河、東寧、ハルビン、瀋陽、大連、に大別されることが分かった。また各地での木材市場関係者からの聞き取り結果、中国東北の木材市場は1998年に起こった黒竜江、松花江の洪水を契機とした、1998年の「天然林保護プログラム」により原則中国東北の天然林伐採は禁止された為、国内産の木材生産は少なく、その代替えとしてほぼ同一樹種が得られるロシア木材の輸入が激増したこと、ここ数年でロシア木材の輸入額は20倍以上に上り、ちょっとした「ロシア木材バブル」であるということであった。特に綏芬河駅には極東地域から毎日500台もの貨車が、直径1m近い巨大なロシア木材を山積して到着している。これらロシア木材は、綏芬河や東寧で建築材やフローリング材に加工されて主に日本へ輸出されている。綏芬河駅周辺にある、見渡すこともできないほど広大な木材置き場に山積されたロシア丸太を見て、北方林の破壊は如何ばかりか、極東で進行している森林破壊の状況が非常に気にかかった。

8. 今後の課題

- ①吉林省档案馆林業総局資料の分析。
- ②大興安嶺、小興安嶺の調査。
- ③遼寧省档案馆の再調査。

9. 留学の成果と反省

成果

留学前、報告者は主に自分の研究地域である鴨緑江流域を中心とした東北東部地域の調査のみに従事していたが、留学期間はこれ以外の地域、特に内モンゴルから遼寧省西部地域を広くまわり、森林状況のみならず、年々悪化する干ばつや、エネルギー不足による粗悪な石炭開発により草原が破壊されつつある状況を詳細に見ることができた。また中国では現在「天然林保護プログラム」によって、原則自然林の伐採は禁止されているが、冬季の木材伐採期間に黒竜江省の森林伐採現場（林業局の許可による計画伐採）を訪問し、中国で最も木材生産の高い地である黒竜江の木材生産現場を視察し、計画伐採現況に関する調査を行うことができた。

このような留学期間において、報告者の従来からの研究である鴨緑江流域森林の調査に加え、西部の草原の状況、北部の森林の現状を視察することができた。報告者は従来、辺境地域である鴨緑江流域の森林開発という限られた視点から研究を行ってきた。しかしこの留学期間に鴨緑江流域以外の調査も行うことで従来の中国東北森林史から“中国東北生態史”へと研究視野を広げ、近代における中国東北地区の国有地の解体に伴う自然資源の急激な劣化過程という全体的な視点から、近現代中国東北地域における鴨緑江流域森林開発過程を検証することが可能となった。中国東北森林史から東北生態史へこれが報告者にとって一番の成果と捉えている。

留学期間の研究成果としては以下のものがある。

研究報告

- ・「『満洲』における馬車輸送システムの成立過程—張政権期を中心に—」近現代東北アジア地域史研究会大会、九州大学箱崎キャンパス国際ホール、2004年12月4日。
- ・「民国時期東北農村運輸体系的形成過程」（中国農業歴史学会第11回大会報告）南京国際会議センター、2005年10月26日。

論文・その他

- ・「鴨緑江木把の暴動—中国東北から見た占領地軍政—」（日露戦争研究会編『日露戦争の新視点』）成文社、2005年5月。
- ・「旧官牧廠地域の荒漠化と緑化」『近現代東北アジア地域史研究会NEWS LETTER』16号、2004年12月。

反省点

- ①遼寧省档案馆が留学期間の後半、長期の書架改修に入り閲覧不可になった為、資料調査を行うことができなかった。林業関連資料でも政治的に重要なものは遼寧に補完されているため、これ非常に残念であった。
- ②中国東北における最大の木材生産地域である黒竜江省の調査が不十分であったこと。
- ③2005年3月と4月の福岡西部地震で自宅が半壊し、パソコンも壊れた為、画像を初めとする資料の多くを失った。

10. 留学生活の感想

長春には日本人留学生はほとんどいないだろうと考えていたが、SARSの影響で吉林大学はかつてないほど日本人留学生が多く30名余りが留学生活を送っていた。また長春は朝鮮族が多いため、韓国人が暮らしやすいのか韓国人が多く、吉大だけで500名以上の韓国人留学生がいた。

吉林大学は留学生招致に大変力を入れていて、留学生寮である吉林大学友誼会館はホテル形式になっており、一階には比較的大きなネットカフェ、室内にバス、トイレ付きで、また一階ごとに大きなキッチンも付いており、生活環境としては非常に快適で10ほど前に報告者が短期留学した太原の山西大学（伝統的な中国学生寮）の環境とは隔世の感があった。

また吉大は留学生同士の交流も盛んにすべく、度々留学生による各種競技大会や運動会、留学生による合掌や詩の朗読コンテストが開催され、また毎月のように郊外の景勝地での遠足やピクニックが組まれており、留学同士の交流も活発で、報告者も様々な国学生達や、まだ10代の若者や定年退職後の60-70代の留学生達ともクラスメートとして毎日楽しく交流することができた。先程も述べたが長春は韓国人留学生が多く、彼等と日韓中の歴史問題やアメリカ軍駐留に関して話合う機会を多く持つことができ、韓国人若者の歴史観を知る非常に良い機会となった。

長春は東北の大都市の中で最も物価が安い為、生活しやすく生活費はそれほどかからなかった。冬季に-30℃になることをのぞけば、大変暮らしやすい環境にあったように感じた。

ただ、留学の後半は日中関係悪化で、東北の資料館（大連市図書館など）で外国人は資料閲覧禁止、または事前に申請をしても閲覧許可が下りないことが多く、目的の資料調査が半分ほどしか進まなかった。帰国したのは反日デモの前後だったが、割と親日的な東北にしては初めて瀋陽で反日デモが起こったり、レストランで日本人を理由に追い出されたりと、ある意味東北では珍しい体験をすることが多かった。日本人留学生、特に女性はこの期間、大学側から外出を控えるよう求められることも多く、不便が多い期間であった。

また現地調査でも企業訪問などは一年を通じて比較的容易であったのに対し、留学期間の後半では政府関係の機関では訪問自体を拒絶されることが多く、思う様に話が聞けないことが多々あった。

現在、日中は経済面の交流は活発でありながら政治的には冷え込んだ状態であるが、これから中国に留学する学生の為にも、政治面でも日中関係が好転することを心より希望している。

写真



写真1 吉林大学留学生運動会



写真2 吉林大学大学院東北アジア研究所（4階）



写真3 遼寧省西部～内モンゴル荒漠化調査（ジャルト旗）



写真4 政府緑化重点地である遼寧西部でのアグロフォレストリーによる緑化事業（遼寧省朝陽市）